

# 中国のネットは劉曉波受賞をどう伝えたか

古畑 康雄

中国の「八〇後」（八〇年代生まれ）を代表する若手人気作家、韓寒はこのほどブログに奇妙な文章を掲載した。「二〇一〇年一〇月〇八日」と題名があるものの、本文には「~~レ~~」と引用符が記されているだけで、本文はまったくない。ブログには「どうして何も書いていないの？」と読者からのコメントが次々と書きこまれたが、彼はその意味を一切説明していない。

だが、「彼の言いたいこと、そして言えないことは分かる」と、来日中の中国人ジャーナリスト、安替は語る。「題名の二〇一〇年一〇月八日、そして引用符に彼の思いは込められている」。一〇月八日は、ノルウェーのノーベル平和賞選

考委員会が中国の民主活動家、劉曉波に同賞を授与すると発表した日である。

韓寒はこの直前にもブログで「国内問題について、平和にデモをすることすら許されない民族が、対外問題について行なうデモなどまったく無意味であり、（北朝鮮の）マスゲームのようなものにすぎない」と反日デモに関して辛らつな批判を発表したところ、サイトを運営する新浪網により削除された。「一〇月八日」の題名が表示するように、彼は劉曉波の受賞について、何か自分の思いを述べようとした。おそらく受賞への支持や喜びの気持ちを表明しなかったのだろう。だが、そのことができないことは、しばしばブログの削除など理不尽な扱いを受けてき

た彼自身が一番分かっている。「劉曉波受賞を喜ぶ文章を発表しても、どうせサイトの管理者は削除するだろう。だから初めから削除しておく。読者は何が言いたいか分かってくれるだろう」という、劉氏への支持とネット上の言論規制に対するユーモアを込めた批判を「~~レ~~」で表現したのだ。

中国政府は「国家政権転覆扇動」容疑で劉氏を投獄中であり、受賞当日もメディアに報道規制を敷いた。短文投稿サイト、ツイッター（中国語は「推特」）への書き込みによれば、劉氏の受賞に関して、「國務院新聞弁公室の最新指示」として「全国のあらゆるミニブログは使用禁止語句に設定、論壇、ブログなどでの

一切の情報発信を禁ずる。後ほど新華社から共通原稿を配信する」との通達があったという。確かにその通り、当日中国メディアは一切受賞を報じなかった。

だが、その知らせはノーベル平和賞のサイトを見ていた中国のネットユーザーの間で瞬時に広がり、ツイッターや国内のミニブログによりニュースが拡散した。

「劉曉波!!」早くも受賞の発表から約三〇秒後には、ツイッターに受賞を知らせる書き込みが登場した。前述の安替も、滞在中の東京から立て続けにツイッターに書き込んだ。(原文はいずれも英語と中国語)

「O God, Liu Xiaobo wins Nobel Peace Prize! Please release him now! 劉曉波が今年のノーベル平和賞を受賞したと発表。平和賞受賞者を直ちに釈放せよ!」

「正直なところ、本当に受賞するとは思っていなかった」と後に語った彼は、感極まったのか、次のような書き込みも残している。

「ノルウェー、私は本当にあなたを愛

している。あなたは中国人民に未来へと向かう機会を与えてくれた。Thank you Norway, you just gave Chinese people a chance towards the bright future!」

「東京のツイッター仲間(中国語では「推友」)へ、今日は私が祝宴を開きます。電話をください。破産したって構わない」中国にいる推友も、様々な言葉で受賞への感激を表現した。

「劉曉波だ。涙が止まらない。受賞により彼が一日も早く監獄を出られるよう、少なくとも獄中で良い待遇が受けられることを希望する」

「感激だ! 劉曉波、おめでとう! 今日酔っ払うまで家に帰らないぞ!」

中国ではツイッターへのアクセスが禁じられている。だが推友は様々な手段を使ってアクセスし、互いに喜びを伝え合った。

だが、受賞の歓喜もつかの間、中国当局による様々な反撃や取り締まりが始まった。推友が各地で開こうとした祝宴は、その動きを察知した警察により封じられた。民主化問題を論じていた

「1984bbs」は一人を超え、会員がいたが、ウェブサイト管理者の「張書記」は警察により軟禁状態に置かれ、さらには家族まで累が及ぶと脅迫を受け、やむなくサイトを閉鎖した。彼はツイッターに閉鎖に至る経緯をつづり、サイトの最後のページに「自由の春はいつかやって来るだろう!」と書き込んだという。

四川省に住む黄雅玲は、「letty」の名前でツイッターに投稿していたが、上海に出張した折に劉曉波受賞への祝意を表そうと上海万博のノルウェー館を訪問、献花し館長と記念撮影、その様子をツイッターにつづった。ところがその晩、上海の警察は彼女が滞在中のホテルを訪問、献花の経緯等を問いただした。

だが彼女はひるむことなく、警察との一部始終を「秋日滬上花与茶」(秋の日、上海の花とお茶)という題名でブログに発表した。花は献花のことだが、お茶とは所謂「喝茶(お茶を飲む)」と呼ばれる、警察がマークした人物に「お茶を飲まないか」と呼び出した脅迫する行為のこと

である。彼女はユーモアを交えながら、警察とのやりとりをつづった（以下はその一部）。

P（警察）…特に印象深かったのは何か？  
L（黄さん）…ノルウェー館長はとてもカッコよかったわ！ 映画スターみたいだった。

P…あなたは結婚しているのに外国人がカッコいいなんてよく言うね（外国人崇拜を馬鹿にした様子）。

L…かっこいい人にうっとりすることのどこが悪いの？ 私の夫も外国の美女を見てきれいだって言うわよ。あなただって美人に会ったらうっとりするでしょう？

P…俺はまだ結婚してないから、美人にうっとりしてもいいんだ。

まるで漫才のようだが、彼女は劉曉波氏の思想に共鳴する部分があること、献花は自分の価値観から決めたこと、それは身の回りの人を愛し、自然環境や次の世代に関心を持ち、人々がより良い暮らしができるようすることだ、献花は自分の感激の気持ちをノルウェー人に知って

もらいたかったからだ、と、正々堂々と述べている。

今回の受賞について、中国メディアはしばしの沈黙を経て、大量のネガティブキャンペーンを開始した。劉氏個人に対する中傷のほか、平和賞選考委員会に対する批判もあった。一〇月二四日に「人民網」に掲載された「ノーベル平和賞は世界平和とは関係がない」との一文では、「平和賞選考委員会の五人はいずれも四人が（ノルウェー）政府の大臣、一人が議長を経験するなど同国政府のバックグラウンドがある。『非政府』の民間組織がすべてノルウェーの政界関係者で占められている。いったい誰が（彼らに）世界平和や正義という重大な問題に批評をする権利を与えたのか。（中略）わずかに人口四〇〇万人の先進国が全世界の六〇億人を代表し、『平和の基準』を定めるだけの能力や見識を持っているのか」と選考委員会の資質に疑問を呈した。

文章はさらに、一九八九年には「民族分裂や武装反乱に携わったチベット人の奴隸主ダライ」（ダライ・ラマ一四世を誹謗す

る時に中国政府が使った表現）に、昨年は世界第一の軍事大国、米国に媚を売るため、アフガニスタンに兵を増派した米オバマ大統領に、今年は中国を転覆した（原文のまま）劉曉波に同賞を授与した、などと口汚く罵った。そして「中国人民を貧困から救い、平和的方法で旧植民地の香港とマカオを取り戻した鄧小平ら真の平和の志士が受賞者名簿に上らなかつた」と記しているが、ここまで書く批判を通り越して恨み言にも聞こえる。

中国共産主義青年団の機関紙、「中国青年報」も一八日、北京の大学生が口々に受賞を批判したとの記事を発表したが、実は彼らはこのような発言をしておらず、ヤラセではないかとの指摘が出た。これらの学生は「中国青年報」の実習生で、同紙に職を得るため名前を貸した可能性があり、自ら名乗らないものの友人らにヤラセの事実を伝えたという。

「当初中国政府は劉氏の受賞をひた隠しにしたが、その後の劉氏に対するネガティブキャンペーンを繰り返したおかげで、今や何億人もの中国人がその事実を

知ってしまった」と前述の安替も指摘する。新華社のある評論は、劉氏の行状を批判する内容でありながら、事実上劉氏が提唱した「〇八憲章」を詳しく紹介、読者にむしろ憲章や劉氏への共感を抱かせる内容だったという。

こうした中、絶妙のタイミングで発表され、注目を集めたのは、広州で発行される雑誌「南方人物週刊」が一八日、カバーストーリーで紹介した石原慎太郎東京都知事のインタビューだ。

記事によれば、石原氏は次のように語っている。「私は中国という国に反対しているわけではないが、共産党がこの国を支配する限り、日本に対して脅威となる」「人間の自由や個性を尊重することとは重要だ。だから私は独裁国家は好きでないし、戦時中の日本も好きではない」「中国経済の発展、社会の成熟の度合いが高まるにつれて、多くの人が共産主義に（これまでとは）異なる考え方を持つようになるだろう」

報道によれば、雑誌はネットユーザーらの呼びかけで飛ぶように売れ、当局は

インタビューのネットへの掲載を禁止したという。だがインタビュー内容はネットユーザーにより次々と転載された。「私はこの〴〵反中勢力が好きになった」「石原慎太郎氏は愛すべき年寄りだ。中国、米国、さらには日本にも耳の痛いことを言う真正正銘の理想主義者であり、心から敬意を表する」ツイッター上ではこのような石原氏への賛辞が繰り返し現れた。

つまり「南方人物週刊」は、多くの中国人が共産党政権に対して思っているとも言えない言葉を、石原氏の言葉を借りて、規制の多い国内メディアで公然と言いつつ放つたのである。政府から批判されても「日本の右翼の言ったことだから」と言い逃れができる。自由の尊重はまさに劉曉波氏の掲げた〇八憲章と通じるものがあり、記事の掲載はまったくの偶然とは言えないだろう。

最後に、一〇月八日に発信されたあるツイッターユーザーの声を紹介しておきたい。

「一回の平和賞が新しい中国を生み出

すとは限らない。だが私たちは感激で涙を流している。人々に対し、国とは何か、党とは何か、我々の権利とは何かを、喚起する必要がある。劉曉波がまだ獄にあることを、私は身の回りの友人に伝えていくし、多くの人に理解してほしい。公民社会は一挙に実現できるものではない。慎重な樂觀主義を持ちつつ、劉曉波と家人を祝福したい」

日本では中国のネット世論といえ、多くの人が声高なナショナリズムを連想するだろう。だがツイッターなどの発言の自由が確保された空間では、判断ができるだけの成熟した議論も育ちつつあるのだ。（ふるはた・やすお 共同通信記者）



●〈中国・本の情報館〉「web 東方」にて好評連載中！

「ネット用語から読み解く中国」 古畑康雄  
<http://www.toho-shoten.co.jp/chinanet/cnew.html>